

プッサン作《嬰兒虐殺》(シャンティイ、コンデ美術館)

—アレティーノの著述に基づく制作という視点からの考察—

倉持充希 (京都産業大学)

ローマの美術愛好家ヴィンチェンツォ・ジュスティニアーニのために描かれたとされるプッサン作《嬰兒虐殺》の最前景には、地面に放り出された幼子に足をのせ、剣を振り下ろす兵士が大きく表されている。先行研究では、「嬰兒を踏みつける兵士」という比較的珍しい人物像の文学的典拠と作品の制作年代をめぐって、主に二つの説が唱えられてきた。マリーノによる八行詩『嬰兒虐殺』(ナポリ、1632年)中の一節を典拠とし、1632年以降に描かれたとする見解と、マリーノが上記の詩を構想する際に参照したアレティーノ著『キリストの人性』(ヴェネツィア、初版1535年)に基づき、1628年頃に制作されたとする見解である(後者の制作年代は様式的判断による)。本発表は、後者の説を支持する立場をとり、その論拠として、アレティーノの著書が1628年に再版された事実と、これまで精読されてこなかった該当箇所とその前後に着目する。具体的には、幼子が脇腹に剣を受けたと語るアレティーノの記述がプッサンに着想を与え、最前景の目を惹く位置に、嬰兒の体から迸る血が示されたとの見解を示す。当該著作のみならず『黄金伝説』や『貧者の聖書』等も踏まえるならば、この幼子の右脇腹の傷は、イエスが十字架上で流した血を連想させるモチーフとしても機能したと考えられる。

アレティーノに刺激を受けた絵画制作は、ティツィアーノに代表される16世紀ヴェネツィア派を愛好したジュスティニアーニの興味を引き付けるものであった。本研究ではさらに、剣を振りかざす兵士の身振りが、ジュスティニアーニ邸の古代彫刻《獅子を殺そうとする剣闘士》の造形を反映したものである点を新たに提起したい。こうした工夫の背景には、ジュスティニアーニの趣味の変化も関わっていたと推測される。彼はカラヴァッジョの熱烈な支持者であり、《嬰兒虐殺》が飾られた邸宅2階の「螺旋階段につながる5番目の大広間」にも、カラヴァッジョ作品の模写やテル・ブリュッヘンに帰属される大型の宗教画等が掛けられていた。しかし、1620年代末にカラヴァッジョ様式の流行が収束に向かうと、彼はベルニーニやコルトーナらではなく、いわゆる古典主義的な美術により関心を注ぐようになる。その変化を端的に示すのが、自邸の古代彫刻を版刻した版画集『ガッレリア・ジュスティニアーナ』であり、上記の《獅子を殺そうとする剣闘士》に基づく一葉も含まれていた。なお、1629年1月には、版画化用の銅板への支払い記録が確認される。

以上の考察により、プッサンが場面を活写するアレティーノの著述やジュスティニアーニの古代愛好を踏まえて構想を練り、同時代画家による大型絵画に引けを取らない迫力ある兵士の姿を、古代彫刻を想起させる厳格な様式で描いて見せたとの結論が導かれる。